

## 第4節 古墳時代の調査成果

### (1) 概要

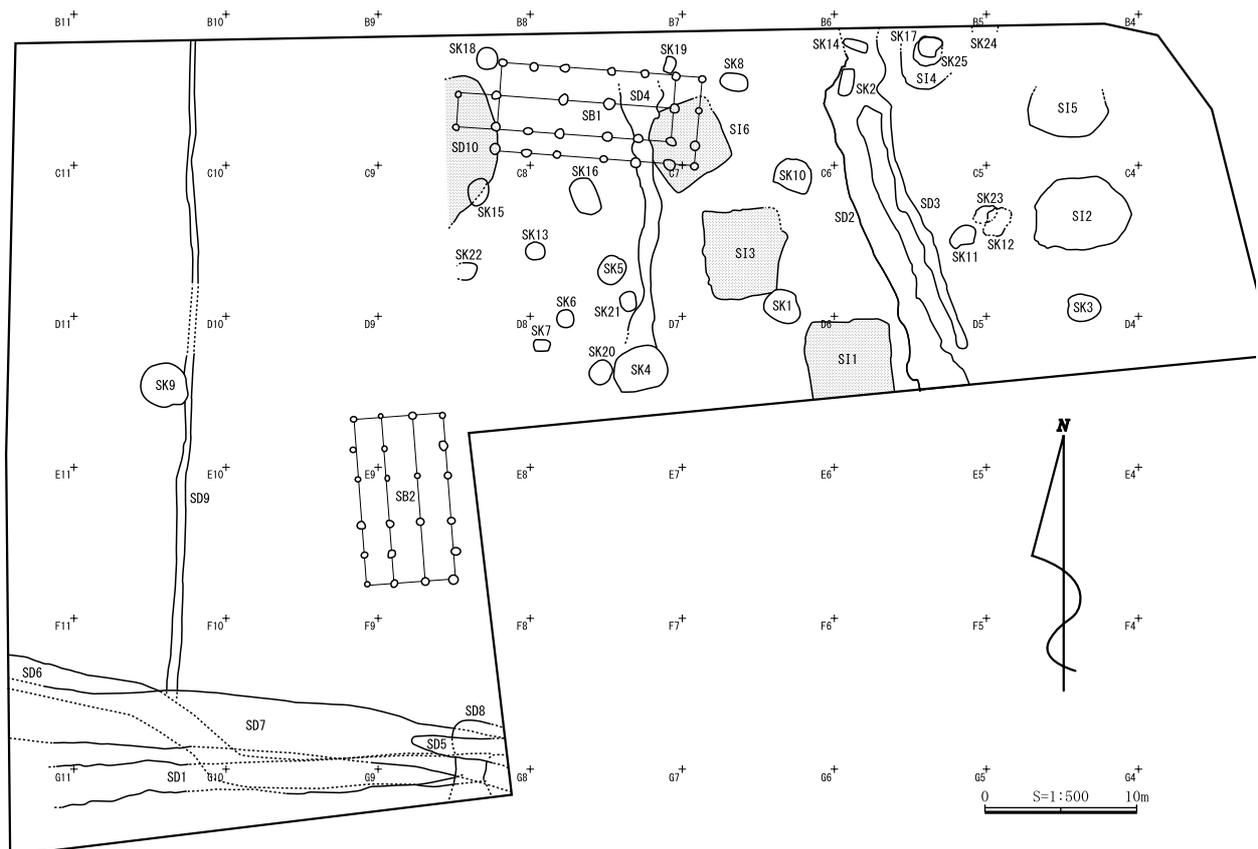
古墳時代の遺構として、竪穴住居跡3軒(SI1・3・6)、溝1条(SD10)を検出した。これからは、いずれも古墳時代後期、八橋期(TK209式併行)前後の土器が出土している。(君嶋)

### (2) 竪穴住居跡

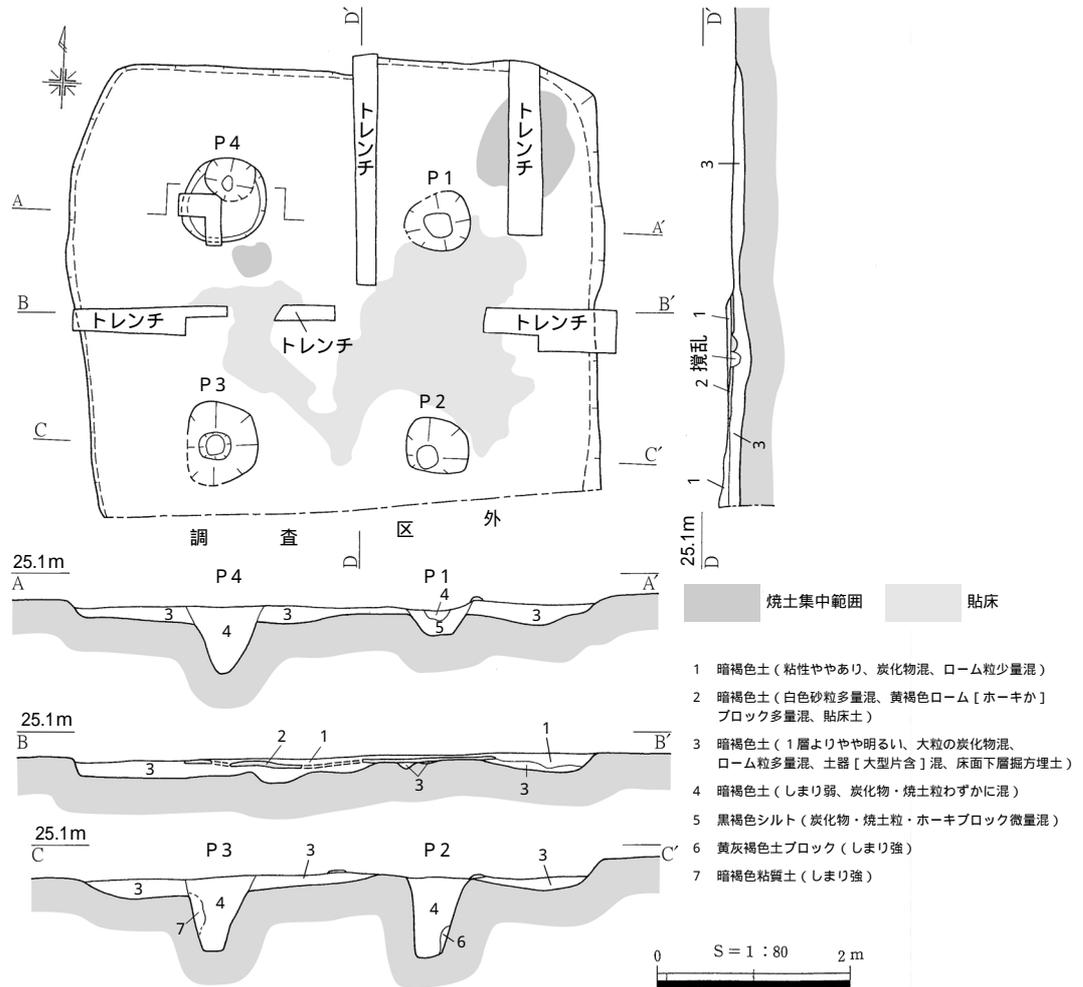
#### SI1(第23・24図、第2表、PL.8・27)

D5・D6グリッドの調査区南壁際に位置する。平面形は、四辺をほぼ東西南北方向に向けた方形を呈する。南辺は調査区外にかかるため正確な規模は明らかにできないが、東西約5.6m、南北約5mである。

掘り込みは非常に浅く、遺構検出面とほぼ同レベルで貼床による硬化面の一部を検出した。埋土として把握した1層は厚さ5cmほどに過ぎない。したがって壁面はほとんど遺存していない。また、貼床下の3層は、地山と非常に似通っているものしまりがやや弱く、土師器、須恵器の小片を包含していた。このことから、3層は粗掘りした住居の掘方に充填された整地土層と判断した。貼床は部分的に遺存していたのみである。なお、住居の北東隅およびP4南側付近の2箇所に焼土の集中が認められたが、ここでは貼床は確認されておらず、焼土自体も硬化していない。したがってこの焼土は3層中に含まれていたものと考えられる。



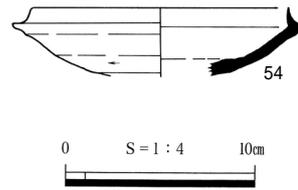
第22図 古墳時代遺構分布図



第23図 SI 1

第2表 SI 1ピット計測表

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	70	65	25
P 2	70	55	85
P 3	90	80	80
P 4	90	85	70



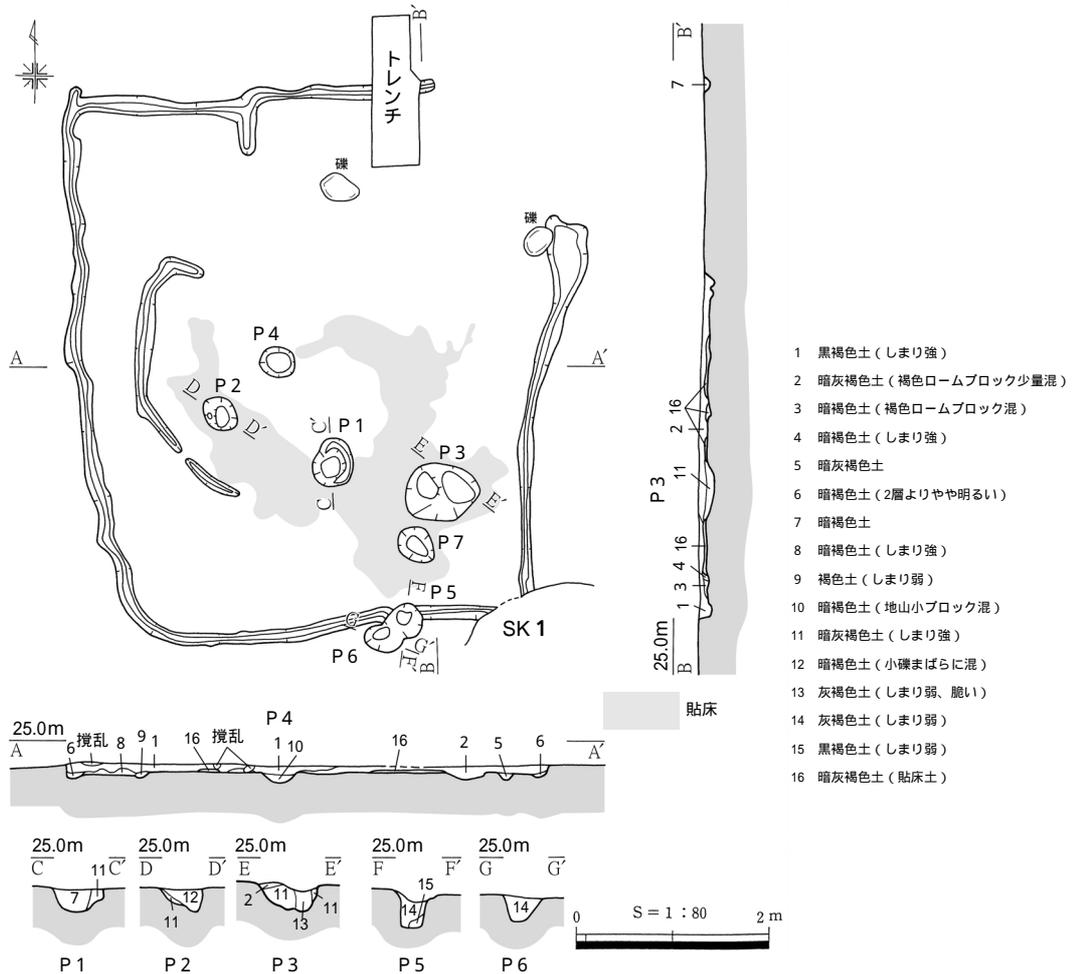
第24図 SI 1出土土器

柱穴は、P1～P4の4基を検出した。土層断面から、3層充填後に掘り込まれたことが窺える。柱痕跡は明確ではない。心々距離はP1 - P2間から順に2.5m、2.25m、2.8m、2.3mであり、ややいびつながらも方形の主柱配置をとるものと考えられる。

遺物は、埋土1層および整地土3層から土師器、須恵器の小片が十数点出土した。図示した須恵器蓋坏坏身54は1層から出土したもので、八橋 期の特徴を示すことから、本住居跡の時期は古墳時代後期～終末期と考えられる。なお、本住居跡出土の須恵器の破片2点について胎土分析を行ったところ、鳥越山窯（倉吉市関金町）産と推定された（第4章第2節参照）。（君嶋）

SI 3（第25・26図、第3表、PL. 8・27）

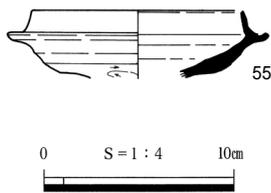
C6グリッドに位置する。南東隅を中世の土坑であるSK 1に切られる。南東方向には3mの間隔においてSI 1が位置する。平面形は、四辺をほぼ東西南北方向に向けた方形を呈し、南北約5.9m、東西約5.4mである。SI 1と同様に掘り込みは非常に浅く、埋土は厚さ10cm程度である。壁面はほとんど遺存していないが、幅約20cm、深さ約5cmの壁溝が四周を巡る。この壁溝は北東隅が途切れるが、この



第25図 SI 3

第3表 SI 3 ピット計測表

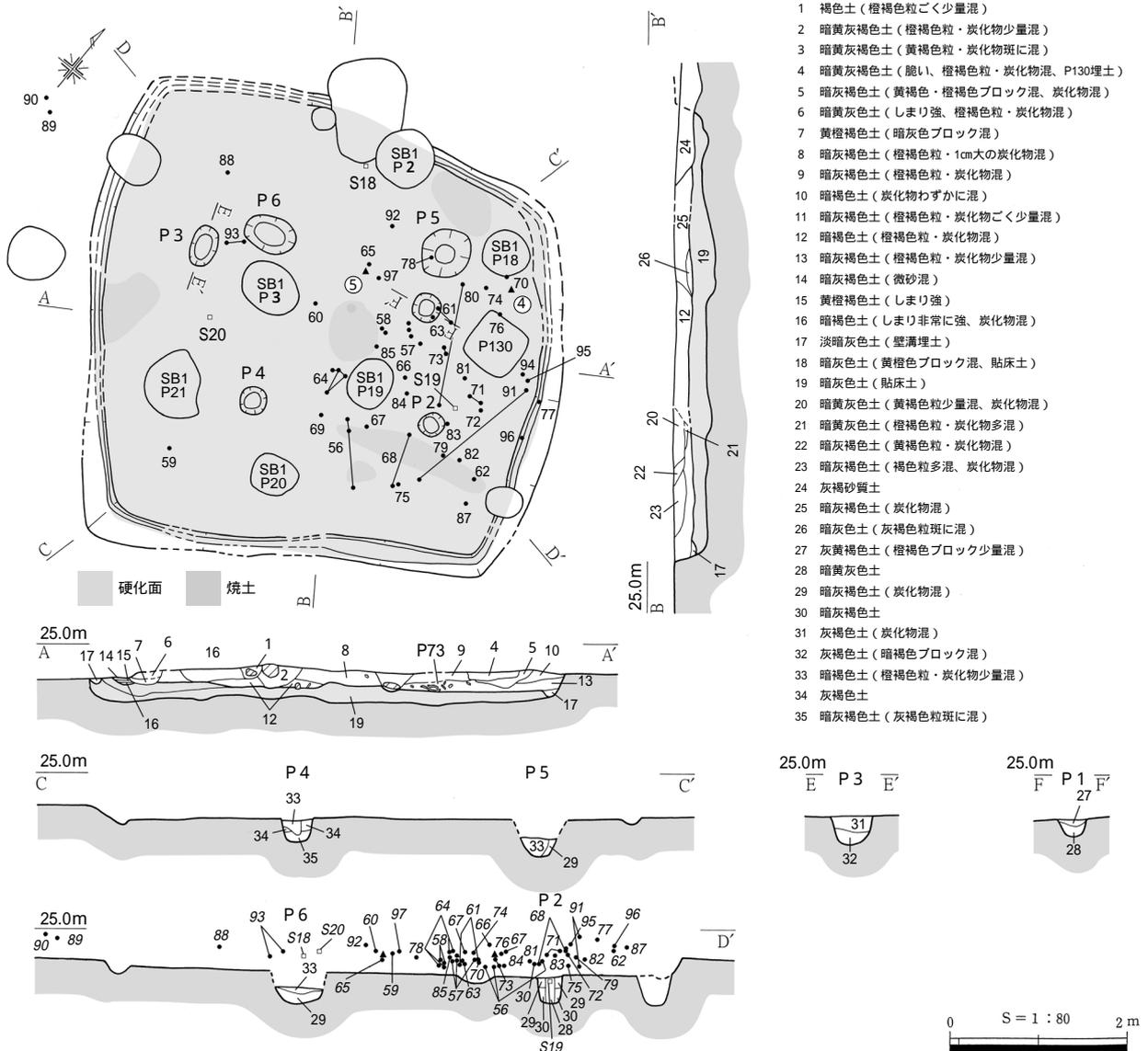
番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P 1	50	43	23
P 2	43	33	24
P 3	78	66	30
P 4	37	33	13
P 5	35		40
P 6	37		29
P 7	45	40	50



第26図 SI 3 出土遺物

部分は削平を受けている可能性が高い。また、住居の西側では壁溝から約60cm内側で弧状の溝を1条検出した。床面は、地山上に貼床を施しているが、貼床の遺存状況はよくない。住居の北側、北壁溝から2mの範囲では地山面が5cmほど高く、意図的に造作されたベッド状の高まりであった可能性もある。ピットは7基検出した。いずれも柱痕跡は明確ではなく、また配置も不規則であり、支柱配置を復元するには至らなかった。南側壁溝に後出するP5・P6は本住居跡に伴わない可能性もある。

遺物は、埋土中より土師器、須恵器片十数点が出土した。また、住居北側の床面上から扁平な人頭大の礫を2点検出した。使用の痕跡は認められず性格は不明である。土器のうち、図示した須恵器蓋坏坏身55は八橋 ~ 期の特徴を示すことから、本住居跡の時期は古墳時代後期～終末期と考えられる。さらに、主軸方向や床面のレベル等がSI 1 とほぼ一致することから、SI 1 と近接した時期に、同一の設計原理に基づいて構築された可能性が想定される。(君嶋)



第27図 SI 6

第4表 SI 6ピット計測表

SI 6 (第27・28・29・30図、第4表、写真3・4、PL.9・27・28・29・30)

C7グリッドの平坦面に位置する竪穴住居跡である。検出面では中世の遺構であるSB 1の柱穴やSD 4が上に重複する。この他にも礫を投棄した後世のピットが多数掘り込まれている。

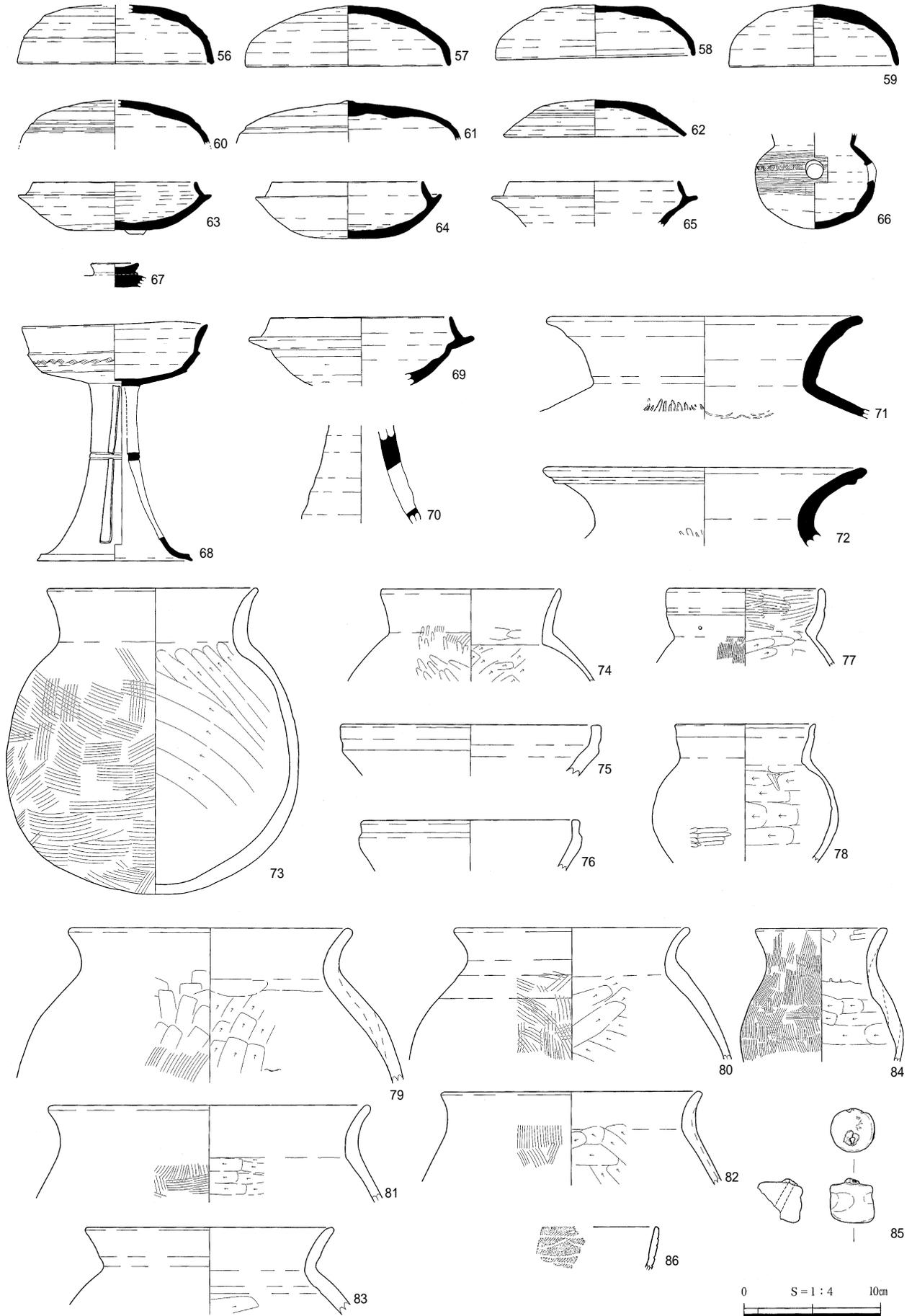
番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
P 1	33	32	40	
P 2	29	27	52	主柱穴 (柱痕跡あり)
P 3	48	30	34	
P 4	32	30	30	主柱穴 (柱抜き取り)
P 5	56	55	42	主柱穴 (柱抜き取り)
P 6	60	42	38	主柱穴 (柱抜き取り)

は復元値

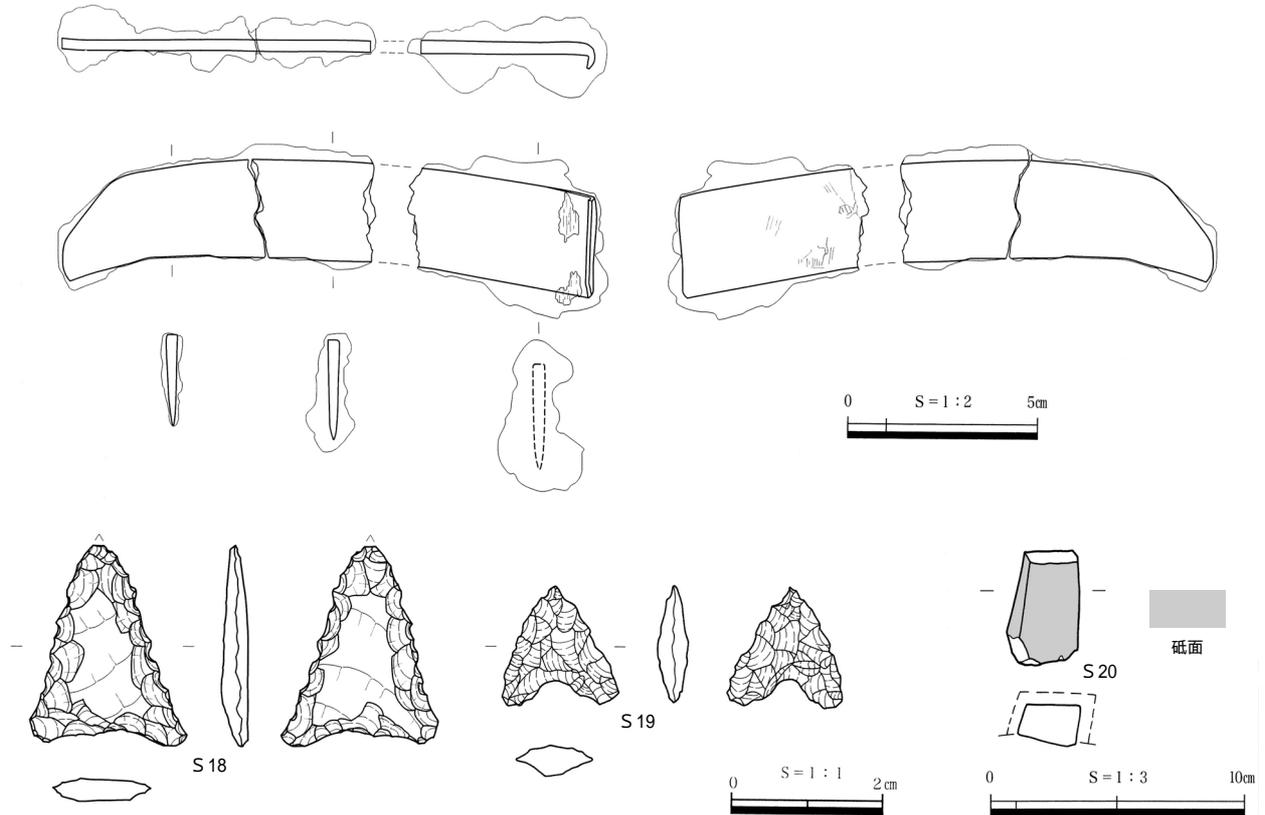
平面は方形を呈しN - 40° - Wに主軸をとる。一辺5.4mを測るが、北東隅はやや不整形となる。壁高は最高で20cm残存する。壁溝は幅12~20cm、深さ6~8cmで断面U字形を呈する。

主柱穴はP2・4・5・6である。床面精査時、後述する貼床土と主柱穴の埋土の峻別が困難であったため、P4・5・6は貼床土を除去してからの検出となった。P1・3はそれまでの柱想定位置である。土層断面観察によりP2では柱痕跡を確認した。その他の柱穴は柱抜き取り穴であると思われる。柱間距離はP5 - P2から時計回りに2m、2.1m、2m、2mとなる。

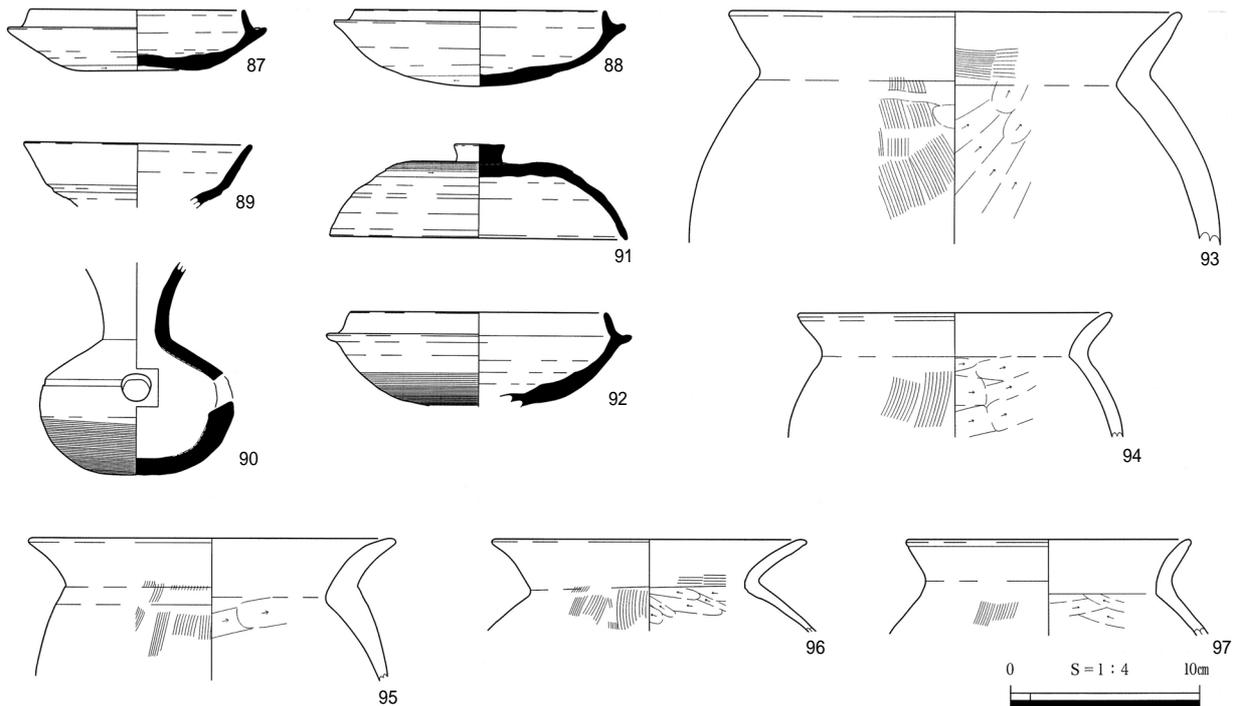
床面には全面に貼床土を付加する。竪穴を掘削する際、いったん床面よりも10~30cmほど深く掘り



第28図 SI6出土遺物(1)土器



第29図 SI 6 出土遺物(2) 石器・鉄製品



第30図 SI 6 周辺出土遺物

込み、それから全面に貼床土を付加して床面を形成している。貼床土は二層にわかれ、それぞれに少量の弥生土器や縄文土器が含まれる。また、床面の数箇所に硬化面があり、その遺存状況から西側床面が若干高くなる。

先述のP2の土層断面から判断して、貼床面を形成した後で柱穴を掘り込み、上部構造を組み立てたものと考えられる。

埋土からは多量の須恵器と土師器が出土した。床面直上から埋土上層まで広範囲に含まれており、住居廃絶時に上部構造を解体後、廃棄したものと考えられる。この他にも直刃鎌 や砥石S20、厚手の土製紡錘車85などが出土している。

須恵器は坏身・坏蓋が多く、田辺編年TK209式に併行する時期と考えられる。土師器は甕が大半で、大きさの異なるものが多岐にわたって出土した。八橋編年 期に相当するものと思われる。これらの出土土器から判断して、住居の廃絶時期は古墳時代後期～終末期であると考えられる。

住居西側の遺構検出面でも須恵器有蓋高坏・甕・蓋坏などが出土した。これらは「SI 6 周辺出土遺物」として第30図に図示した。これらの遺物も本来はSI 6で廃棄されたものであり、SB 1 造営時にSI 6 埋土上で柱穴（SB 1 P2・3・5、P18～P21など）を掘削した際に二次的に移動したものと考えられる。

（西川）



写真3 SI 6 甕(66) 出土状況

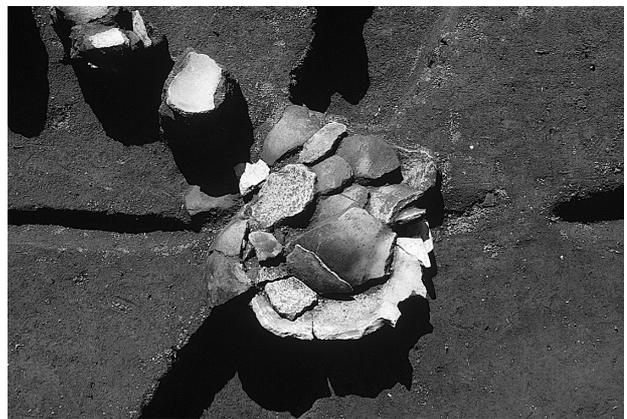


写真4 SI 6 土師器甕(73) 出土状況

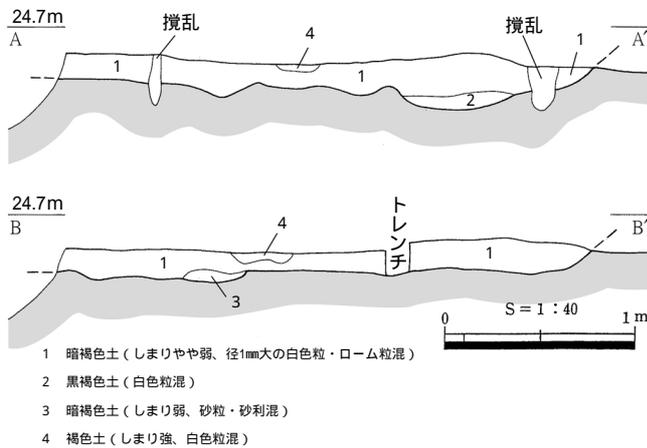
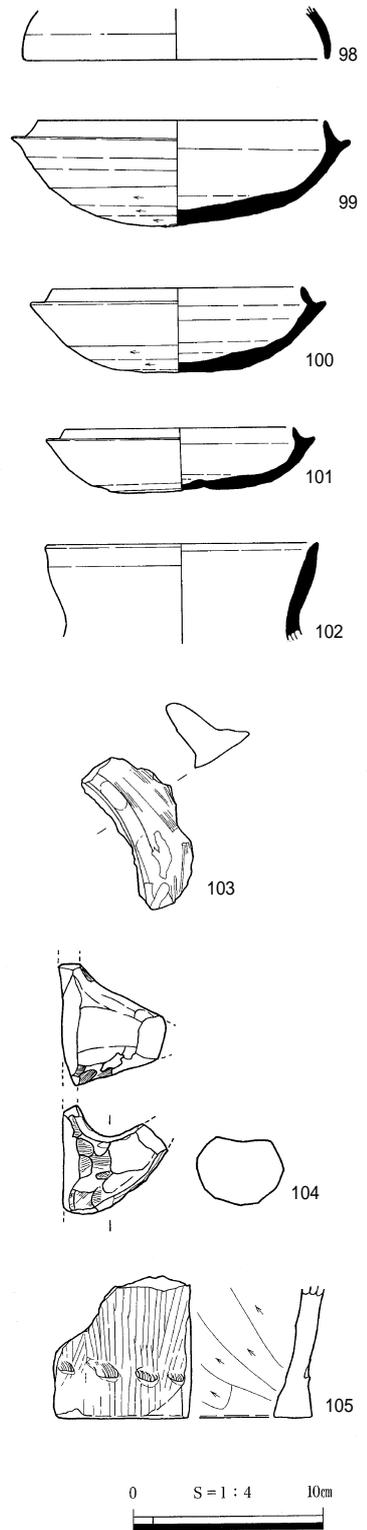
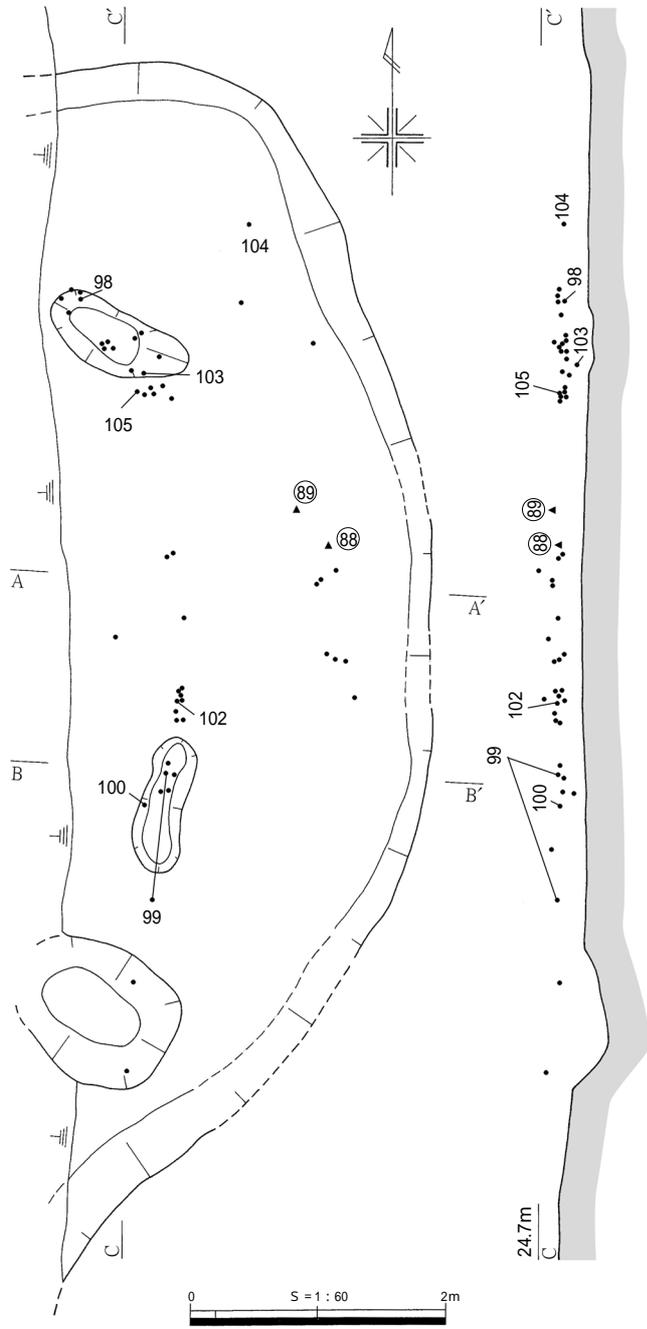
### （3）溝

SD10（第31・32図、PL.10・30）

B8・C8 グリッドに位置し、中世の遺構であるSB 1・SK15に切られる。西側は後世の攪乱により壊されているため、平面形は不明である。検出した長さは約10mである。主軸・走向ともに明確にできないが、南側において南西方向に角度を変えており、さらに南西にのびていく可能性がある。検出した幅は2～2.4mである。検出面からの深さは最大で約30cmであるが、特に北側ではSB 1 造成時の削平により遺存状況は悪く、深さ約2cm程度しか残っていない。断面形は西側が不明であるが、非常に浅いU字形と推測される。溝底面の標高は北端で約24.3m、南端で24.4mであり、北端の方が約10cm低い。埋土は暗褐色土を主体とし、10～20cm大の礫が少量混じる。また、黒褐色土および拳大の礫や砂利を少量含む浅い落ち込みが3箇所確認された。

遺物は埋土中から土器片、鉄滓が数十点出土した。出土位置は、先述した浅い落ち込みに集中する傾向がみられる。須恵器坏蓋98、甕底部103、甕脚部105は北側の落ち込みから、須恵器坏身99、100、須恵器口縁部102は中央付近の落ち込みから出土した。98、100の焼成は土師質に近い。坏身99、100、101はいずれもかえりが内傾・短小化しており、口唇部は尖り気味である。甕脚部105は外面ハケ調整後、刺突列点文が施される。鉄滓は3点出土し、うち2点を図示した（⑧⑧、⑧⑨）。土器の特徴は八橋～期を示すものであり、埋没時期は古墳時代後期～終末期と考えられる。

溝の性格については明らかにできないが、3箇所の落ち込みで確認された砂利の堆積から、一時期



第31図 SD10

- 1 暗褐色土（しまりやや弱、径1mm大の白色粒・ローム粒混）
- 2 黒褐色土（白色粒混）
- 3 暗褐色土（しまり弱、砂粒・砂利混）
- 4 褐色土（しまり強、白色粒混）

第32図 SD10出土遺物

に水が流れていたか滞水していた可能性が高い。また平面形や断面形などから判断すると、人為的に掘られたものではなく、自然に形成された落ち込みである可能性も考えられる。

（山根）